

2017年度 大学院奨励研究員研究報告書

2018年 3月 30日

関西学院大学学長 殿

奨励研究員

氏 名	周 芷 冰	印
-----	-------	---

指導教員

所属・職名	文学部 教授	
氏 名	大橋毅彦	印

以下のとおり、報告いたします。

研究課題	芥川龍之介文芸における中国表象とその変容
採用期間	2017年 4月 1日 ~ 2018年 3月 31日

研究科委員長・研究科長印	事務局印

提出先： 所属研究科事務室

研究発表状況（奨励研究員採用期間内に発表したものおよび、近く発表予定のもの）

(1) 学会誌等への発表（著者、発表論文名、学会誌名、巻号、発表年月、掲載頁等）

雑誌論文	著者名	周芷冰	論文題目	芥川龍之介『江南游記』論——芥川が見た新しき「江南」——		
	雑誌名	「人文論究」		巻号	発行年月	掲載頁
				Vol. 67 No. 2	2017年9月	1～23

雑誌論文	著者名		論文題目			
	雑誌名			巻号	発行年月	掲載頁

図書	著者名		論文題目			
	書名			発行年月	頁	
					総頁：	
				担当箇所：		

※論文題目：共著の場合の担当部分のタイトル

(2) 学会発表（口頭・ポスター：学会名、開催地、発表論文名、発表年月日等）

学会名	日本キリスト教文学会関西支部	開催地	京都外国語大学
題目	『秋山図』から見る芥川龍之介の南画趣味と芸術観	発表年月日	2017年7月29日

学会名	国際芥川龍之介学会	開催地	中国海洋大学
題目	芥川龍之介『秋山図』論——芸術における普遍的な「美」と芥川の芸術観	発表年月日	2017年9月17日

学会名		開催地	
題目		発表年月日	

研究経過状況（3000字程度）

中国趣味者としての芥川龍之介は生涯にわたって、中国に関連する作品を数多く創作した。ただし、これらの作品に反映されている中国表象は一貫したのではなく、大正10年の中国旅行を分水嶺として、その前後の中国物には歴然とした差異が見られる。本研究はこの差異に着眼し、大正10年の中国体験をもととする『支那遊記』を中心に据え、芥川文芸における中国表象とその変容の軌跡を明らかにするものである。大学院奨励研究員に採用された2017年度において、これまでの研究を踏まえながら、主に中国旅行の直前に執筆された『秋山図』（「改造」大正10年1月）と『支那遊記』に収録されている『江南遊記』（「大阪毎日新聞」大正11年1月1日～2月13日）を取り上げ、以下のような問題点を考察した。

芥川の中国認識とは、彼が幼少期から親しんできた中国古典文学への憧憬を基礎とするものであり、古典文学に基づくロマンチックな中国イメージであったと言えよう。加えてその認識は、同時代の作家たちの描く、異国情緒に溢れた中国物からも多大な影響を受けている。このような中国認識があつて、大正10年の中国旅行以前には、異国情緒に溢れた中国物が数多く執筆されている。中国旅行の直前に発表された『秋山図』もその代表的な一篇に数えられるのであろう。『秋山図』は今関寿麿編の『東洋画論集成』（読画書院 大正4年12月）に収録されている『秋山図の始末を記す』を下敷きにして創作されたものである。中国古典文学、特に南画への愛好は芥川の中国物の創作や中国像の構築にとって不可欠な部分だと言えよう。簡潔に言えば、南画の世界は芥川にとって憧れていた昔の中国の面影を具現化したものであり、古典世界の〈美〉を徹底的に表すところでもある。名画「秋山図」をめぐる認識の差異を語る『秋山図』にもこの芥川の南画趣味が用いられていると考えられる。『秋山図』論では、まず芥川の大正9年頃の南画趣味が『秋山図』の成立を促したことを明らかにした。また、作中に登場した六人の鑑賞者たちの名画「秋山図」に関する理解の差異と評価の変容に注目し、芥川が初期から考え続けている芸術における普遍的な〈美〉の有無とその有り様が、いかに『秋山図』に反映されているのかについて究明した。つまり、煙客翁と王石谷の会話によって、名画「秋山図」を象徴する普遍的な〈美〉が一時的に曖昧模糊になったように見えるが、作品の後半部に登場した廉州先生の「秋山図」への絶賛と惲南田の「煙客先生の心の中には、その怪しい秋山図が、はつきり残つてゐるのでせう。それからあなたの心の中でも（略）秋山図がないにしても、憾む所はないではありませんか」という最後の言葉を通して、南画を愛する芥川は名画「秋山図」を借りて、芸術における普遍的な〈美〉の存在を確かなものとして力強く描き出そうとしている。それと同時に、この芸術の有り様を問うには最も適する『秋山図』の世界を通して、中国の芸術・文化が醸し出す〈美しさ〉と〈ロマン〉も強く表現されていると思われる。

『秋山図』にも示されているように、中国旅行以前に執筆された作品に見られる〈中国〉は異国情緒やロマンと密接に繋がっているものである。ところが、大正10年の中国旅行は、古典文学や同時代作家たちの中国物を介して構築した芥川の〈中国〉を大きく変容させた。想像した中国と現実の中国との間に見られる大きな落差を目の当たりにした芥川は、一連の紀行文において、かつて彼が抱いていた中国イメージがもはや変貌してしまっていることに加え、墮落していく現実の中国に対する失望の情、あるいは中国の現状や改革の難局に対する憂慮をも如実に書き留めている。この変容した〈中国〉は『支那遊記』に収録されている『江南遊記』一篇にも鮮明に反映されている。

江南は西湖や寒山寺などのような名勝を抱え、昔から文人学者と名妓美人たちを輩出した土地である。それ故、中国文学史上においても、江南の美人と美景を賛美する詩句や文章が多く見られるのである。近代に入って、江南一帯も当時中国を見物する外国人たちが頻りに訪れる名所であり、文学作品の舞台としてもしばしば取り上げられている。幼少期から中国古典文学に親しんできた芥川は中国旅行の前においてもすでに『南京の基督』（「中央公論」大正9年7月）や『奇遇』（「中央公論」大正10年4月）などのような江南を舞台にした小説を執筆している。そして、いずれの作品においても異国情緒に溢れ、古典文学の空間を思わせる作品の世界が展開されている。『江南遊記』においても、古代中国の面影を髣髴とさ

せる異国情緒に溢れた江南の風景を楽しんでいる作者の様子がしばしば書き込まれている。ただし、ここで注意しなければならないのは、『江南游記』には、江南の風景を賛美する情景よりも、むしろ伝統風景の荒廃や西洋化していく江南を目にした芥川の複雑な気持ちを述べる箇所が圧倒的に多い。換言すれば、古典文学にあるような〈江南〉よりも、1920年代の時代性を刻み込んだ〈江南〉に芥川はとりわけ注目していると考えられよう。

また、『上海游記』などの紀行文に比べ、『江南游記』における同時代の作家たちの中国物がより多く取り上げられている。このようなことから、芥川は同時代の作家たちの江南物や中国紀行文などの資料を参考にしながら、『江南游記』を執筆したことが推測される。とすれば、『江南游記』における同時代の作家たちの〈江南像〉との比較を行いながら、芥川の〈江南〉への眼差しを明確にすべきだと思われる。つまり、現実の中国に根ざし、この悠久の歴史を持つ国を「老大国」として再認識した芥川は、『江南游記』において、谷崎潤一郎らの中国趣味者のように幻想を交えて美化した〈江南〉ではなく、また徳富蘇峰らが持っている、帝国主義で支配すべき時代遅れの〈江南〉でもなく、1920年代に存在している内憂外患が絶えない素顔の〈江南〉に迫っていると言える。さらに、芥川は単に表面的に江南の荒廃していく風景への批判と憂慮を繰り返しているのみではなく、この風景の背後に生活している江南の庶民たちにも目を向け、彼らの「娑婆苦」をも感知している。そして、彼の〈人間観察〉によって、1920年代の時代性が刻印されている〈江南〉から、古往今来の中国人の心に深い根を張っている〈反骨精神〉或いは〈革命的精神〉をも発見し、彼らが起こした革命運動にも関心を寄せながら、この「老大国」における革命の胎動と新しい未来をも見据えている。このように、旅行以前に創作された『南京の基督』や『奇遇』に書かれている〈江南〉と、大正10年の中国旅行を挟む『江南游記』に描かれた〈江南〉との間には著しい差異が見られるのである。つまり、異国情緒に溢れた〈江南〉は、江南での体験を経て、1920年代という時代の色彩を帯びた、新しい動きを孕む表象へと変容したと考えられる。そして、この新しき〈江南〉の一面を見出した芥川は谷崎や蘇峰らの江南像に対峙し、動きつつある新時代の〈江南〉の一面をも『江南游記』を通して読者に伝えようとしていたのではないかと思われる。

以上のように、幼少期から中国古典への憧憬を強く抱き、また同時代作家たちの異国情緒に溢れた中国物に影響された芥川は、旅行以前において、『秋山図』のようなロマンチズムに溢れた中国物を数多く執筆したのである。大正10年の中国体験を経て、中国旅行以前の作品に見られたロマンチックな〈中国〉が作品の中から消え、逆に『江南游記』などの一連の紀行文に示されているような新しい動きを孕み、時代性が刻み込まれた〈中国〉が次第に現れ、さらに戦争や時代を語る作品が創作されるという一連の変遷を見通すことによって、芥川の中国物に描き出されている〈中国〉とその変貌の軌跡をも明らかにし得たと言えよう。

大正時代において、実際に様々な目的を持って、多くのジャーナリストや文学者たちが中国に渡り、自らの中国体験をもとにした彼らの中国物においてもそれぞれの1920年代の〈中国〉が描出されている。芥川は大阪毎日新聞社の海外特派員として中国を旅し、「有ゆる方面に支那固有の文化が新世界の夫と相交錯する所」に注目するという基本的な目線で中国を見つめ、1920年代の時代性を帯びた激動する〈中国〉を旅行以後の一連の中国物に生き生きと描き出したのである。芥川作品に現れている中国表象の有り様とその変容は芥川文芸にとってだけでなく、大正時代における日本人から見る〈異国〉の一視点としても不可欠な一部だと考えられる。今後はこれまで検討した内容をもとに、中国旅行が芥川文芸の全体像に与えた意義、また芥川作品に現れている中国表象がそれ以後の文学者たちに与えた刺激と影響、さらにほかの作家たちの〈中国〉像との比較を行いながら、日中両国から見る〈中国〉の全体像をより深く研究していきたいと思う。

以上が2017年度大学院奨励研究員の研究成果概要である。博士学位論文は、以上の研究成果を含めて、2017年11月末に提出した。

以上